

もう一つの「秘密文書」

——「松室報告書」について

齊藤泰治

1936年9月、松室孝良少将が関東軍会議に提出したとされる報告書は、翌年、The China Weekly Review、さらにプラウダに掲載され、1938年以降、朱徳や毛沢東によって言及された。満蒙を見据え、華北の重要性を論じたこの文章は、あたかも謎の文書「田中上奏文」の如く、「日本の方針」を示すものとして位置づけられ、プロパガンダに利用された。本稿は1938年に出版された『日本侵華之間諜史』に書かれた部分をもとに紹介するものである。この「報告書」は華北における密輸、原料、市場をはじめ、中国の役人、一般民衆、共産軍、共産党、大陸浪人に関しても分析を加えており、中国観察記録としても興味深い。そこでは一部中国人を「恐日病」と見なすと同時に、抗日勢力が団結した場合に対する警戒が隠されていない。各集団を連合させないように分断し、互いに牽制させることの重要性が説かれている。管見のかぎり、日本語文は確認できず、中国語文、英語文のみ確認できる。